
『ダーク・ロード —— 黄昏に抗う者』

S・HUNTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『ダーク・ロード —— 黄昏に抗う者』

【Nコード】

N2946Z

【作者名】

S・HUNTER

【あらすじ】

桐生貴夜は生まれ持ったの外観と学年トップの成績、そして反抗的な態度によって一部の不良生徒から虐待を受けていた。彼は暴力的な行動を嫌い、親友である神代顕人にも、自分の為に暴力で持つて復讐するのを止めているほどであった。

無残な死体を残し、街を恐怖に陥れている連続殺人事件が続いていたある夜、貴夜はその犯人と思しき黒衣の大男とであった。その男は『オーガ』と呼ばれている『闇の種族』ダーク・レイスで、男は潜在的に強力

なパワーを持つ貴夜の魂に惹かれ、貴夜を手に入れよう考える。

黒衣の男——闇に堕ちる以前は、かつては『闇の種族』と敵対していた『聖戦士』だった——が貴夜に襲い掛かる寸前、それを阻止した少女の名はリーゼロッテ。『闇の種族』の中でも『主』^{ロード}と言う上級のカテゴリに属する、青と紫の瞳を持つ小柄な美しい少女だった。しかも古代の魔術を駆使する『護法魔導師』と言う魔術師でもあるのだ。

『オーガ』を撃退した後、リーゼロッテは貴夜自身が『主』^{ロード}としての種であることを告げ、『オーガ』の手から守ることを約束した。貴夜を『主』^{ロード}として覚醒させる儀式を執り行っていた時、『教会』の『聖戦士』がリーゼロッテを襲撃した。本来は『オーガ』を始末する為に派遣された『異端処理官』ヴィトリーオは、偶然に発見した『七主』であるリーゼロッテに功名心を刺激されたのだ。

こうして貴夜は、自分たちを闇と光のどちらかに属するという者達の、血生臭い闘争に巻き込まれていくのだったが……。

どこの国でもそうなのだろうが、この国の国際空港のロビーも酷く混雑していた。

雑多な肌と髪の色様々な人種が、極東のこの国のどこよりも多くそこには集まっているが、その少女はその中でも一際目立つ存在だった。

特に大きな体格ではない。いや、どちらかと言えば小柄で華奢な体つきの愛らしい少女だ。淡い浅葱色のワンピースがさらに愛らしさを醸し出している。

年の頃は十五、六であろうか？ 人形のように整ったその顔はどこかつまらなそうな表情で、ロビーのソファに座ったまま行き交う人々を眺めていた。自分が人の目を集めていることに気づいてもいない。

細い金糸を集めたような、白い輝きを放つ腰までの長いプラチナ・ブロンドは、淡い水色のリボンが飾られ、北欧人のようなミルク色とは趣の違う、蒼白いほどの白い肌に相まって、どこか作り物じみた外見を強調している。

——しかも天上の名匠による奇跡の造型だ。人間の手にはこれほどの美しさを顕わすことなど、きっとできはしないだろう。

少女が人工的な印象を与えるのは、きっとその瞳の色にも理由があるであろう。

左右の色がはっきりと違うそれは、オッド・アイとか金銀妖瞳とか呼ばれているものだ。地方によってはいまだに魔女の印、邪悪の象徴ともされている。

右目は夜明けの空のような青。左目は黄昏に近い空の赤味を帯びた紫色。

どこか幻想的な美しさを見る者に印象づけるその瞳こそが、少女の存在そのものを顕わしているようだった。幽玄の、どこか生身の

人間とは思えないようなその印象のすべてを……。

少女の傍らには、さらに幼い少女が座っていた。

十歳に満たないであろうこれもまた愛らしい少女だった。藍色に近い黒髪を背中まで伸ばし、大きな赤いリボンを飾っている。その大きな瞳は青空を氷で閉じ込めたような鮮やかな水色をしているが、どこか表情に乏しい落ち着いた雰囲気醸し出している。

二人の美少女は、自分たちに向けられている視線をまるで感じる様子もなく、どこか超然としてソファに座っていた。周りの一切を存在しないものと振舞っているかのようにも感じられる。

「本当にゴミゴミした所ね。それに空気も良くないわ」

金髪の少女はつまらなそうな声で呟いた。桜色の唇がすこし突き出ている。

先ほどのまでの作り物じみた印象が、そこできらりと変わってしまうような表情と口調だった。つんとしたその顔は急に生氣を感じさせる。

「時代が変わってしまったのですから仕方がないでしょう」

黒髪の少女はその外見からは想像も出来ないような大人びた、そして無感情な口調で金髪の少女に答えた。

「それにあなたの意思でこの島にやって来たのですよ、ミレディ」

旧い言葉で黒髪の少女は金髪の少女を『ご主人様』^{マ・イレディ}と呼んだ。この二人は主従関係にあるのだ。

「——そうね。でも正直言えば、なぜこの国にあの方がやって来たのかわたしには理解できないわ。それに……」

「あの方がなんの為にこの国へやって来たのかなど、ミレディには関係ないと思いますが。どちらにしろ、ミレディはあの方を——」

「わかってるわよ。でもね、やはりわたしはあの方を見つけることができないかも知れない。見つけてもわたしには……」

少女の声は、最後の方は呟きになって消えた。その色の違う瞳に、わずかに暗い影がよぎった。

「それもミレディの意思で決定するのなら問題はありません」

黒髪の少女の声は無機質だった。だが金髪の年上の少女は、わずかな笑みを浮かべてビロードのような黒髪を撫でた。

「いつまでもこんな所に居てもしょうがないわね。一休みして体調も元に戻ったことだし、そろそろ行きましょう」

金髪の少女はしなやかに立ち上がり、小さな鞆一つを手に提げて、出口に向かって歩き出した。その後ろを黒髪の少女が追う。どこか辺りを探るように、その小さな頭を左右に振りながら……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2946z/>

『ダーク・ロード —— 黄昏に抗う者』

2011年12月10日13時46分発行